

宇和島
初

大竹伸郎 作品誕生

パフィオうわじま 2019.4.6 sat OPEN!

生涯学習センターホール緞帳に大竹伸郎氏による『のぞき岩』が鮮やかに描かれる!



【緞帳仕様】プロセニウム寸法 幅10.0m×丈6.0m
(制作寸法) (幅11.0m×丈6.8m)
西陣織緞錦(つづれにしき)緞帳
題名:のぞき岩 原画作者:大竹伸郎



市長
挨拶



宇和島市長 岡原文彰

宇和島市の新しい顔として、玄関口となるJR宇和島駅前の「宇和島市学習交流センター」"パフィオうわじま"のホールに、現代美術家で宇和島市民である大竹伸郎氏が無償で制作に全面協力いただき、宇和島市初の大竹作品として緞帳が完成したことを大変嬉しく思います。

これを機に、多くの市民の皆さんが現代アートに触れ、豊かな感性を育てていただくとともに、ふるさと宇和島を誇りに思っただけければ幸いです。

また、大勢の皆さんが日頃の生涯学習の成果を、この緞帳の幕が上がるたびに発表していただけることを期待しております。

パフィオうわじま
PAFIO UWAJIMA

正式名称:宇和島市学習交流センター
愛媛県宇和島市鶴島町8番3号

- 1F 生涯学習センター
- 2F・3F 中央図書館
- 4F 子育て世代活動支援センター
からなる複合施設

《生涯学習センター・ホール》

289席の移動式観覧席。音楽や演劇など市民の学習成果の発表の場として、広く愛されるホールを目指します。

宇和島市学習交流センター「パフィオうわじま」1F 生涯学習センター

TEL 0895-49-5922 FAX 0895-49-5999 E-mail u-gakushu@ca.pikara.ne.jp

ホームページ <https://www.pafiouwajima.jp/>

指定管理者:(株)上田

パフィオうわじま



原画のモチーフとなった宇和島市の大浦にある『のぞき岩』

宇和島湾の入口に立つこの奇岩は、古くから船路の旅立ちに、あるいは旅の終着に、宇和島の海の玄関のシンボリックな存在でした。

昭和の時代は、「赤松遊園地」として大勢の人で賑わう憩いの場でした。



作者 挨拶



大竹伸朗(オオタケ シンロウ)

1955年、東京生まれ。1980年代初頭より国内外で作品発表を開始。

1988年制作拠点を宇和島市に移す。

2006年の初回顧展「大竹伸朗 全景1955-2006」(東京都現代美術館)以降、光州ビエンナーレ(韓国)、ドクメンタ(13)(ドイツ)、ヴェネチア・ビエンナーレ(イタリア)、横浜トリエンナーレ、瀬戸内国際芸術祭はじめ国内外の企画展に参加。

主なパブリックワークとして「シップヤード・ワークスシリーズ」「はいしゃく舌上夢／ポッコン覗>」「直島銭湯 I♥湯」(直島,香川)、「女根／めこん」(女木島,香川)、「針工場」(豊島,香川)、「北の空に浮かぶカタチ」札幌市生涯学習センター、「種景」(伊方町,愛媛)。

2018年11月最新エッセイ集『ナニカトナニカ』(新潮社)刊行。

2019年4月から10月「大竹伸朗 ビル景 1978-2019」展が巡回する。

2014年芸術選奨文部科学大臣賞受賞。

緞帳「のぞき岩」のこと。

一年ほど前、宇和島市から「緞帳」制作の御依頼をいただき、この度無事完成しました。

「できれば宇和島にまつわるものを」とお聞きし、真っ先に頭に浮かんだのが「赤松のぞき岩」の「マッチ箱」でした。30年ほど前に初めてのぞき岩を訪れた際、長年管理されていた森田御夫妻からいただいたものです。その図柄には古き良き宇和島の風土やここに住む人々のおおらかさ、同時に「未来的な空気」が封じ込まれているようで想像力を強く刺激されました。

今回いただいた機会に、かつてマッチ箱の絵を描いた絵師、これまで様々な形で宇和島を支えてきた人々に敬意を込め、西陣織という伝統技術で「宇和島未来バージョン」を織り込んでみようと考えました。自分自身は、単にマッチ箱と緞帳をつないだ「仲介役」にすぎません。

今回「パフィオウわじま」開設がきっかけとなって生まれた緞帳「のぞき岩」が、宇和島の未来に向かって末永く愛されることを願ってやみません。

辰野川沿の桜の下で 大竹伸朗 2019年 春

緞帳 とは

緞帳は「綴織(つづれおり)」という手法により、全て手作業で織り上げられています。

綴織は、経糸(たていと)の下に緞帳原寸大の織下絵を置き、杼(ひ)に巻いた緯糸(ぬきいと)を経糸に通し、織りわけて図柄を表現する伝統的な技法です。

緯糸に無限の色数を使うことができるので、多彩で複雑な図柄を自在に表現できます。

【色彩】鮮やかな色調を表現するため、染料に蛍光増白剤を加え、色糸を鮮やかに染め上げました。

また部分的に金糸や銀糸を織り込んでいます。

【質感】切り紙の素材感、厚みの陰影、絵具の筆致を忠実に織物に表現しました。

【量感】紙の重なりポリウム感を表現するため、大胆に糸量を増やしながら織り方の工夫を随所に加えています。また、重なり部分の端部には微妙に色糸を使いわけることで、より原画に忠実且つ効果的に貼絵の立体感の表現が出来るよう工夫を加えました。

大竹先生のご指導の下、弊社の熟練職人の最高の技術により、心をこめて緞帳を制作し、完成することが出来ました。

2019年2月8日 株式会社 川島織物セルコン

